

患側下肢の重量感を訴える大腿骨転子部骨折術後症例への臨床経験

○若月 勇輝¹⁾ 千鳥 司浩²⁾ 平井 達也³⁾ 吉元 勇輝⁴⁾ 金尾 和浩¹⁾ 木佐貫 昌哉¹⁾ 岩谷 竜樹⁵⁾ 舟木 浩平¹⁾

- 1) 医療法人和光会 川島病院リハビリテーション部
- 2) 中部学院大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科
- 3) 医療法人愛仁会 名春中央病院リハビリテーション科
- 4) 医療法人和光会 清風苑リハビリテーション室
- 5) 医療法人幸会 みず里

【はじめに】

大腿骨近位部骨折術後の高齢患者は痛みや不快感により生活の質が低下する (Adib Hajbaghery, 2013)。臨床では、患側下肢が健側下肢に比べ重いと不快感を訴える患者が存在するが、このような重量感の評価や介入報告はない。今回、患側下肢が重いと訴える患者に対し、認知課題を行う経過の中で重量感の訴えが消失したので報告する。

【症例】

80歳代、男性、HDS-R 29点、X日に左大腿骨転子部骨折を受傷、急性期病院へ入院、X+16日に骨接合術施行し、X+59日にT字杖歩行監視レベルで回復期病院へ転院となる。X+83日まで筋力増強練習、歩行練習を中心に実施したが、患側下肢の重さを訴え「足が重くてスムーズに歩けない」と記述し、運動単位の動員異常がみられたため、X+91日より認知課題を開始した。

【評価・認知課題】

患側下肢の重量感の評価方法は、健側大腿部に錘を装着し、錘を漸減していく中で、症例が患側下肢と同じ重さと感じた錘の重さを患側下肢の重量感とした。パフォーマンスの評価は、ハンドヘルドダイナモメーターを使用した股関節屈曲力 (Hip Flexion: HipFx) およびTimed Up & Go Test (TUG) を測定した。認知課題では患側下肢に装着した錘の重さを弁別するよう求めた。

【経過】

結果をX+91日・X+93日・X+94日・X+97日の順に示す。重量感 (g) は、1250・1200・600・0, HipFx (kgf) : 6.5・8.1・10.9・15.3であった。TUG (秒) はX+91日24.3, X+97日17.3であった。

【考察】

患側下肢の重量感、HipFxは経過とともに改善し、重量感の改善は筋力に関連している可能性が示唆される。また、主観的重さの増大は拮抗筋の筋活動を増大させることが報告されており (大住, 2015)、認知課題を行っていく中で拮抗筋の活動が抑制され、重量感が改善した可能性が推察される。しかし、今回は筋活動の評価を行っておらず、今後は筋電図を用いて分析する必要がある。また、シングルケーススタディによる検討を行っていないため、認知課題以外の要因の可能性も考えられ、他の症例についても検討していく必要がある。本症例の評価、介入方法を議論したい。

【倫理的配慮、説明と同意】

本報告の目的と趣旨、個人情報保護の説明を書面と口頭にて行い、本人と代諾者の署名をもって同意を得た。